

概念工学の実装の一方法としての外延に基づく方法

藤川直也 (Naoya Fujikawa)

東京大学

概念工学の旗手たるカペレンは、概念工学の実装段階に対するある種の悲観論者としても知られている。Cappelen, H. (2018) *Fixing Language: An Essay on Conceptual Engineering*によれば、概念を人為的に意図した仕方で変化させるという概念工学の実装の試みは、「仕組みはよくわからないし完全なコントロールができるわけでもないけれどやり続けるしかない」何かである。彼の考えは次のようなものだ。意味(彼は概念工学のターゲットは言葉の意味だと考える)の外在主義が正しければ、意味決定・変化のメカニズムの詳細を私たちはよく知らないし、そもそもそれが私たちに意図してコントロールできるようなものであるとも限らない。それゆえ、新たに設計された仕方で社会で共有されるものとしての意味・概念を変化させるための確実な方法論など存在しない。この意味で概念工学はいわば無理ゲーだ。しかしそれが無理ゲーであるということから、私たちはそれを一切断念してしまってもいいということとは帰結しない。たとえば子育てが無理ゲーだとしても、それは子育てを諦めてしまってよいということの意味しないのと同じように。無理ゲーだろうがなんだろうが、概念が何かしら問題のあるものである限り、それはやらねばならないことなのであり、手探りで暗闇の中を進むようであっても、なんとか頑張ってできることをやるしかない。

設計された概念を社会実装するというプロジェクトの全体を見通すことは困難で、さらに結果を完全にコントロールするというのも難しいだろう(そしてそのことが倫理的な問題の一因となることもある)。他方で、このことは、概念工学の実装に関して私たちが全くの無策であるということの意味しない。手探りなら手探りなりに何かしらとっかかりとなるような方法はあってもいいはずだ。ここでは、そうした方法の一つとして、外延に基づく方法というものを考えたい。概念の変化がその適用に関する境界的な具体例をきっかけに引き起こされてきたということを確認した上で、具体例をきっかけとした概念の変化についてのモデルを提示し、それに基づいて具体例の提示によって概念を変化させる方法について論じる。